



太子講の聖徳太子の掛軸

このほど、国の重要文化財に指定された鷹見泉石関係資料のなかに、黄銅製の曲尺があります。曲尺は「さしがね」ともいいますが、影で操つる意味で使う「さしがね」は、操り人形の手足を動かすための棒で、ちよいと意味が違うもの。ここでいう曲尺は直角に折れ曲がつた形の金属製の物差しで、墨壺などと並び大工道具の中でも、大工職人たちが特に大切にしてきたものです。

この曲尺、実は又四郎尺・享保尺・念仏尺などといういくつもの尺度があり、それぞれ微妙に長さが違い、長らく規格が統一されていませんでした。それでも曲尺といえ、一般に又四郎尺が使われていたように、その基準となる原器は、大阪四天王寺に江戸時代まであったといわれています。

ところで、大工職人には太子講という集まりがあります。古河でも10月第三日曜日には、大工職人たちによって太子講が行われているようです。そこでは、聖徳太子の掛け軸をまつり、親睦を深めて共同飲食をします。「日本最古の木造建築とされ

る法隆寺建立時に太子が職人をかわいがったから」「太子が中国から技術を伝来させたから」、それが聖徳太子を講のシンボルとする所以だということです。そういえば、先の又四郎尺の四天王寺も聖徳太子が建立したとか。いずれにせよ、これらの寺院は、聖徳太子という後ろ楯のもとに、さまざまな職人が活躍する場だったのでしょうか。太子講は、大工のみならず、左官・畳・竹細工等、手業によって「家作り」「もの作り」にかかわる職人たちそれぞれ職種で営まれてきました。よく見るとこの写真の「聖徳太子」の文字、曲尺をはじめ職人たちの道具を並べて描いているじゃないですか。

さまざまなもの作りの神様(？)聖徳太子。これを信仰していない方々でも、何となくありがたいと感じてしまうのは、ひとえにかつてのあのお札のモデルであったからというだけではないのでしょうか。私たちの生活に欠かせない、もの作りのシンボルそのものだったのですから。